

## まえがき

九死に一生を得るといふ言葉があるが、もとより生還を期さぬ特攻は、文字通り十死零生の酷烈非情な戦法であつた。

だがかの大戦時、わが身に代えて祖国日本を守らんと、多くの若者たちが自らの意志で競うようにこの十死零生の特攻を志願した歴史的事実を忘れてはなるまい。世界史上に例を見ぬこの凛烈にしてかつ清冽な歴史的事実を忘却するところから、現代人の精神の荒廃が始まる。

特攻の主力は、海軍も陸軍も十八歳から二十歳までの若者で占められ、海軍は飛行予科練習生出身者、陸軍は陸軍少年飛行兵出身者が主体であつた。たとえば特攻を象徴する神風特別攻撃隊を例にとると、特攻散華した後、連合艦隊司令長官よりその名を全軍に布告された者は二千百五十二人で、そのうち予科練出身者は千三百八十五人で全体の約六五%を占め、次いで学徒出陣の予備学生・生徒出身者が六百五十一人で約三〇%となり、残りの約五%、百十六人が海軍兵学校及び海軍機関学校出身者となつてゐる。予科練を抜きにしては特攻は語れぬというのもそのためであり、その予科練出身者の主力は十八、九歳の少年たちであつた。

また神風特別攻撃隊敷島隊は特攻第一号として知られており、爆装零戦五機で編成されたが、兵学校出身の隊長関行男大尉を除けば、他の四人の隊員はみな予科練出身の十八、九歳の若者たちであり、特攻における予科練の位値づけがこれからも容易に理解できるであろう。

そこで予科練、すなわち正式には海軍飛行予科練習生の歴史を簡単に説明すると、大正十年（一九二〇）のワシントン海軍軍縮会議で、主力艦（戦艦と空母）の保有量が米英各五に対して、日本三の割合に制限された。そのため日本海軍は主力艦の劣勢を補う策としてかつてない高性能の重巡洋艦（二万吨級）を次々と建造するとともに航空兵力の充実を急ぎ、昭和三年にまず航空本部を創設し、翌四年、海軍少年航空兵制度を定め、さらにその翌五年六月一日、第一期飛行予科練習生を七十九名採用した。

この第一回目の募集は定員八十人に対して、八千余名が応募したというからその人気のほどが知れよう。ちなみに当時、東京帝大よりも人気の高かった海軍兵学校は百五十人の採用に対して三千人の応募であった。

そして予科練第一期生が横須賀海軍航空隊に入隊したこの年五月、ロンドン海軍軍縮会議が開かれ、日本海軍は主力艦以外の補助艦艇群でも制限を受けることになり、航空兵力の充実は一層促進されることになった。

昭和十二年七月、日華事変が勃発すると航空兵力の急速な拡充が要求され、同年九

月、甲種飛行予科練習生（甲飛）が誕生し、従来の練習生は乙種飛行予科練習生（乙飛）と呼ばれるようになった。

またこの採用人員の増加に伴い、横須賀海軍航空隊では手狭てまとなったため、昭和十四年三月には広大な霞ヶ浦航空隊の練習部に移り、さらに翌年十一月、この練習部が独立して土浦海軍航空隊となり、いわゆる予科練教育のメッカとなった。

その後、大東亜戦争が勃発すると、予科練生の採用は飛躍的に増加したため、土浦のみでは対応できず、三重、第二美保、奈良、鹿児島、高知、松山（各九千人）、福岡、倉敷、滋賀、小松、浦戸、小富士（各五千人）、清水、三沢、宝塚（各三千人）、宇和島、西ノ宮、高野山（千五百〜二千人）と次々と増設され、膨大な数の予科練生を採用した。ちなみに予科練（乙飛）一期生の採用人員は前述したように七十九人であったが、もっと多く採用した甲飛十四期生（昭和十九年四月入隊）は五万二千百十九人、次に多い甲飛十五期生（昭和十九年九月入隊）は三万五千五百八十五人に及んでいる。文字通りケタ違いである。

また予科練生の区別であるが、甲種、乙種の他に特乙種と丙種もあるので、その違いを簡単に説明しておく。

まず甲種は、中学四年（後に三年）程度の学力のある者から採用し、年齢でいえば十六、七歳で入隊し、教育期間は予科一年、本科六ヶ月（後に短縮）であった。

ついで乙種は、高等小学校卒業程度の学力のある者から採用し、年齢でいえば十四、五歳で入隊し、教育期間は予科三年、本科一年（後に短縮）であった。

特乙種は乙種予科練合格者の中から優秀者を選抜採用し、丙種は海軍の一般兵科から志願した者の中より採用した。

また予科練という飛行機搭乗員というイメージが強いが、実際は予科練生は一切飛行機には乗らず、搭乗員となるための各種の基礎訓練を行なった。

そしてこの予科練教程を終えると、本科の飛行術練習生となり、この教程を予科練に対して飛練、すなわち飛行練習生教程と呼んだ。

そしてこの飛練教程を終えると、いよいよ延長教育とも実施部隊とも呼ばれる実用機教程に進む。いわゆる練習航空隊から作戦部隊へ配属替えとなるわけである。また戦争末期は作戦部隊のほとんどが特攻部隊であったため、配属された若者たちは自動的に特攻隊に編入されるケースが多かった。

また昭和十八年十月入隊の甲飛十三期以後は飛行機不足が顕著になり、予科練卒業後、飛練教程へは進まず、人間魚雷回天や爆装ボート震洋等の特攻隊を志願する者が多かった。ちなみに回天特攻の戦死者八十六人、殉職者十五人、総計百二人のうち、予科練出身者は三十九名ともつとも多く、あと予備学生出身者二十六名、海軍兵学校出身者十七名（他に自決者二名）、海軍機関学校出身者十二名、一般下士官七名とつづく。

さらにいうなら人間ロケット桜花による特攻戦死者は総計八十九人で、そのうち予科練出身者は実に七十人を占めている。神風特攻も回天特攻も桜花特攻も、すべて予科練出身の十八、九歳の若者たちが主体となつて行なわれたのである。我が身に代えて祖国日本を守らんとしたこれらの若者たちの純粋な祖国愛というものはいくら称えども、称えすぎることではない。

また彼ら自身も予科練出身であることを大いなる誇りとし、たとえば神風特攻隊員として十九歳で沖縄海域にて特攻散華した鈴木喜久男（乙飛十八期）は、

「この大東亜戦の勝負は、喜久男の双肩おに在るを自覚し、今後ますます碎身、一死君恩に報いる覚悟です」  
といい、さらに、

「予科練は国の柱となる」  
と断言しているし、また回天特攻隊員として十八歳で沖縄海域にて特攻散華した佐野元（甲飛十三期）は、

「胸中に神州の曙を画き、勇んで敵艦船と大和魂との撃突を試みん」  
という壮烈な言葉を残している。彼らは皆、予科練出身であることを大いなる誇りとし、特攻隊員に選ばれたことを男子一代の誉れと思ひ極め、祖国日本の永遠平和のために、潔く散つていった。日本史上、これほど美しくまた哀しい青春はない。

子科練出身の息子を亡くしたある母親は、後にわが子をこう述懐している。

「二十一歳を一生と生れきて、男子と生れ、男の中の男、まして甲種飛行練習生、しかも第一期として県を代表させて頂き、死して一億民の尊崇を受け、これに過ぐる光栄なく、感謝の涙にくれております。あの子はいたってやさしく、心から可愛く、何につけても生前の事が偲ばれます」

戦争が始まれば、いつの時代もどの国でも、まず真つ先に戦場に立つのは若者たちである。そして彼らがいかに戦ったかということは、それぞれの国の歴史にくつきりと刻印される。たとえ戦争に負けようと、若者たちが存分に戦い、立派に死んだとすれば、歴史は決して彼らの戦いを忘れないし、その壮烈な最期は民族精神を鼓舞する叙事詩に昇華する。先の大戦の特攻隊の若者たちはまさにその典型といえよう。神風特別攻撃隊の創始者である大西瀧治郎中將は、特攻第一号となる敷島隊以下の特攻隊員にいまじくもこう訓示している。

「日本はまさに危機である。しかもこの危機を救いうるものは大臣でも、大将でも、軍令部総長でもない。もちろん、自分のような長官でもない。それは諸子のごとき純真にして気力に満ちた若い人々のみである。したがって、自分は一億国民にかわって皆に願ひする。どうか成功を祈る」

そして特攻隊を送り出した大西は、

「この神風特別攻撃隊が出て、しかも万一負けたとしても、日本は亡国にはならない。これが出ないで負ければ真の亡国になる」

と側近に洩らしたという。さらに何度目かの特攻隊を送り出した時、新聞記者から、「長官、特攻隊で戦況が挽回できるのですか？」と聞かれた大西は、

「比島の敵は食いとめられるかもしれないがな。戦の大局はだな……」

といつて、口をつぐんだ。そこで新聞記者がたたみかけるように、「じゃ、なぜ、特攻をつづけるんですか？」と問うと、大西は、

「会津藩が敗れたとき、白虎隊が出たではないか。ひとつの藩の最期でもそうだ。いまや日本が減びるかどうかの瀬戸際にきている。この戦争は勝てぬかもしれない」

と答えた。すると新聞記者が、「それならば、なおさら特攻を出すのは疑問でしょう」と問いつめると、大西はこう断言した。

「ここで青年が起たなければ、日本は滅びますよ。しかし、青年たちが国難に殉じていかに戦ったかという歴史を記憶する限り、日本と日本人は滅びない。この若者たちの体当り精神とその実行、これが日本を救う原動力なのだ。作戦指導も政治もこの精神と実行に基礎を置かなくてはならぬ」

このとき大西の内面では、特攻は区々たる戦略や戦術のレベルを飛びこえ、救国の

思想に昇華していたのである。祖国日本の危急存亡の秋、多くの若者たちが自ら望んで特攻を志願して国の大事に殉じていった。そして特攻というこの自己犠牲の崇高な行為が日本史に鮮烈に刻みつけられるならば、たとえ戦争に敗れたとしても、日本が亡国の道をたどることはない。大西は確信したのである。

敗戦によって国民精神が荒廃してゆけば、国家というものは必ず滅亡してゆくことを世界史は証明している。そして大西はそれを知るからこそ、国家百年の大計のためにあえて特攻出撃を下令したのである。大西自身、特攻を「統率の外道」といい切った人物であり、特攻を継続中もしばしば、

「前途有為の青年をおおせい死なせてしまった」

と側近にもらしていた。そして終戦の大詔が発せられると、大西中将は特攻出撃の責任を一身に負って、ためらいもなく割腹自決を遂げた。遺書が残されている。

「特攻隊の英霊に申す。善く戦ひたり。深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。しかれどもその信念は遂に達成し得ざるに到れり。われ死をもって旧部下の英霊とその遺族に謝せんとす」

この遺書はさらに、「次に一般青壮年に告ぐ」として、こう続けられている。

「吾死にして、軽拳は利敵行為なるを思ひ、聖旨に添ひ奉り、自重忍苦する誠めとならば幸ひなり。隠忍するとも日本人たるの矜持を失う勿れ。諸子は国の宝な

り。平時に処し尚よく特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の平和のため最善を尽せよ」

大西にとつて「特攻精神」とは、「日本人たるの矜持」そのものだったのである。そこで改めて遺書の冒頭の「特攻隊の英霊に曰す。善く戦ひたり。深謝す」という言葉の深くかつ重い意味を感じることができようであろう。

特攻は昭和十九年十月二十五日から二十年八月十五日の終戦当日まで十ヶ月にわたって続けられた。その間、特攻を命じる側も命じられる側も、「日本人たるの矜持」を堅持しつづけた。しかも特攻の主体は二十歳になるやならずの若者たちである。彼らは日本人であることの誇りを胸に特攻を志願し、その誇りとともに散華していった。その見事な死にざまほど日本男子の鉄腸を引き締めるものはないし、その凛烈にして清冽な自己犠牲の崇高な精神ほど、日本人の国民性の美しさを象徴するものはない。特攻とかその主体となった予科練という言葉や死語とし、忘却の彼方に押しやれば、日本人の国民精神は必ず墮落し、荒廃する。

歴史は学ぶものであり、忘れるものではない。ことに一国の興亡を賭けた大戦争が始まった時、日本の若者たちは国家の要請に応え、断ち難い私情を潔く断ち切って軍服に身を固め、泣きごとや恨みごとや言わず、敵の蹂躪から祖国日本を護るために、黙々と戦場へ赴き、その多くが非命に斃れた。いかに時代が変わり平和日本となろう

とも、この歴史的事実を忘れてはならない。かつて評論家の小林秀雄はこういった。

「過去の時代の歴史的境界性というものを認めるのはよい。しかしその限界にも拘らず、その時代の人々が、いかにその時代のたった今を生き抜いたかに対する尊敬の念を忘れては駄目である。この尊敬の念のないところには歴史の形骸があるばかりだ」

日本史は美しい。その美しさは世界史に巍然として屹立している。それはその時代の時代の「たった今」を日本人ひとりひとり懸命に生き抜いてきたからに外ならない。ことに先の大戦で散華した特攻隊の若者たちの精神像ほど美しいものはない。彼らは己れの立身栄達のためではなく、祖国日本の美しい山河とそこに住む愛しい人々を守るために自ら望んで十死零生の特攻を志願した。その人生は余りにも短かったが、彼らは間違いなく美しく生き、美しく死んだ。真実の命を生きるとはこういうことである。

戦争最末期の十ヶ月で、陸海軍合わせて約四千五百人の若者たちが特攻散華した。これほど多くの若者たちが自己犠牲の崇高な精神を堅持して、十ヶ月もの長期間にわたって、次々と国難に殉じていった例は世界史上にも一度としてない。まさに特攻は世界史の奇蹟であり、日本史の誇りである。

この無私精神、無償の奉仕に対する尊敬の念を忘れては、小林秀雄のいうとおり、「歴史の形骸があるばかり」である。われわれ日本人は好むと好まざるとに関わらず、日本史のたった今を生きている。そしてこの日本史を一層美しいものとするためには、日本人としての誇りを堅持して懸命に命を生きさせた特攻隊の若者たちのように、今日という日を精一杯に生きる以外にない。

特攻、それは日本男子の勇気の在り様を世界の精神史に鮮烈に刻みつけた悲壮美の極致ともいえるべき一大モニュメントではあるが、特攻という名の青春は、やはり限りなく悲しく、また傷ましい。だがそれゆえにこそ、この哀切な青春を忘れぬということとは、永遠の平和とは何か、人間性の尊厳とは何か、という人間存在の根本命題を考える際の重要な指標となるのである。

特攻という名の青春、日本史上でこれほど美しく、かつ哀しい青春はない。だがその美しさ、哀しさは、間違いなく日本人の涼やかな純粹精神を象徴するものであり、その清冽な青春は日本史の大いなる誇りとして、日本に生まれ、日本に生きる人々を、未来永劫、鼓舞してやまないであろう。

北影雄幸